

藪の中

芥川龍之介

青空文庫

檢非違使に問はれたる木樵りの物語

さやうでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違ひございませぬ。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた所でございますか？ それは山科の驛路からは、四五町程隔たつて居りませう。竹の中に瘦せ杉の交つた、人氣のない所でございます。死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつた儘、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたやうでございます。いえ、血はもう流れては居りませぬ。傷口も乾いて居つたやうでございます。おまけに其處には、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないやうに、べつたり食ひついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございませぬ。唯その側の杉の根がたに、繩が一筋落ちて居りました。それから、——さうさう、繩の外にも櫛が一つございました。死骸のまはりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一

面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、餘程手痛い働きでも致したのに違ひございません。何、馬はゐなかつたか？ あそこは一體馬などには、はひれない所でございます。何しろ馬の通ふ路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

檢非違使に問はれたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございませう。場所は關山から山科へ、參らうと云ふ途中でございます。あの男は馬に乗つた女と一しよに、關山の方へ歩いて參りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのは唯萩重ねらしい、衣の色ばかりでございませう。馬は月毛の、——確か法師髪の馬のやうでございました。丈でございませうか？ 丈は四寸もございませうか？ ——何しろ沙門の事でございますから、その邊ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携へて居りました。殊に黒い塗り籠へ、二十あまり征矢をさしたのは、唯今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかやうにならうとは、夢にも思はずに居りましたが、まことに人間の命など

は、によろやくによでん如露亦如電ちがに違ひございませぬ。やれやれ、なん何とも申しやうのない、きをどくこと氣の毒な事を致いたしました。

檢非違使に問はれたる放免の物語

わたしが搦からめ取とつた男をとこでございませぬか？　これは確たしかに多たじやうまる囊丸いと云いふ、名な高たかい盗ぬすびと人でございませぬ。尤もつともわたしが搦からめ取とつた時ときには、馬うまから落おちたのでございませぬ、粟あはだぐ田た口の石いし橋はしの上うへに、うんうん呻うなつて居をりました。時じこく刻くでございませぬか？　時じこく刻くは昨夜さくやの初しよかうごう更ごう頃ごうでございませぬ。何いつ時ときぞやわたしが捉とらへ損そんじた時ときにも、やはりこの紺こんの水すい干かんに、打う出ちだしの太た刀ちを佩はいて居をりました。唯ただいま今はその外ほかにも御ご覽らんの通とほり、弓ゆみや矢やの類るゑさへ携たずさへて居をります。さやうでございませぬか？　あの死しがい骸がいの男をとこが持もつてゐたのも、——では人ひと殺ころしを働はたらいたのは、この多たじやうまる囊丸ちがに違ちがひございませぬ。革かはを卷まいた弓ゆみ、黒くろ塗ぬりの籠えびら、鷹たかの羽はの征そ矢やが十七ほん本ほん、——これは皆みな、あの男をとこが持もつてゐたものでございませぬ。はい、馬うまも仰おつしや有ある通とほり、法ほふし師しがみ髪つきげの月つき毛げでございませぬ。その畜ちくしやう生おとに落おされるとは、何なにかの因いん縁えんに違ちがひございませぬ。それは石いし橋はしの少すこし先さきに、長ながい端はづな綱なを引ひいた儘まま、路みちばたの青あを芒すすきを食く

つて居りました。

この多襄丸と云ふやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございませぬ。昨年の秋鳥部寺の寶頭廬の後の山に、物詣でに來たらしい女房がひとり、女の童と一しよに殺されてゐたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乗つてゐた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、何處へどうしたかわかりませぬ。差出がましようございませぬが、それも御詮議下さいませ。

檢非違使に問はれたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございませぬ。が、都のものではございませぬ。若狭の國府の侍でございませぬ。名は金澤の武弘、年は二十六歳でございませぬ。いえ、優しい氣立でございませぬから、遺恨なぞ受ける筈はございませぬ。娘でございませぬか？ 娘の名は眞砂、年は十九歳でございませぬ。これは男にも劣らぬ位勝氣の女でございませぬが、まだ一度も武弘の外には、男を持つた事はございませぬ。顔は色の淺黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜實顔でございませぬ。

武弘たけひろは昨日きのむすめ娘と一しよに、若狭わかさへ立つたのでございませうが、こんな事ことになりましたとは、何なんと云いふ因果いんぐわでございませう。しかし娘むすめはどうなりましたやら、婿むこの事ことはあきらめましても、これだけは心配しんぱいでなりません。どうかこの姥うばが一生しやうのお願ねがひでございませうから、たとひ草木くさきを分けましても、娘むすめの行方ゆくへをお尋たづね下さいまし。何なんに致いたせ憎にくいのは、その多たじや襄丸うまるとか何なんとか申まをす、盗ぬすびと人のやつでございませう。婿むこばかりか、娘むすめまでも、………(跡あとは泣なき入りて言葉ことばなし。)

多襄丸の白状

あの男をとこを殺ころしたのはわたしです。しかし女をんなは殺ころしはしません。では何處どこへ行いつたのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問がうもんにかげられても、知しらない事ことは申まをされませう。その上うへわたしもかうなれば、卑怯ひげふな隠かくし立てだてはしないつもりです。

わたしは昨日きのふの午少ひるごし過ぎ、あの夫婦ふうふに出會であひました。その時風ときかぜの吹ふいた拍子ひやうしに、牟む

子の垂絹が上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその爲もあつたのでせう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとひ男は殺しても、女は奪はうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思つてゐるやうに、大した事ではありません。どうぞせをんなうば、女を奪ふとなれば、必、男は殺されるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使ふのですが、あなた方は太刀を使はない、唯權力で殺す、金で殺す、どうかするとお爲こかしの言葉だけでも殺すでせう。成程血は流れない、男は立派に生きてゐる、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考へて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。(皮肉なる微笑)

しかし男を殺さずとも、女を奪ふ事が出来れば、別に不足はない譯です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪はうと決心したのです。が、あの山科の驛路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚が

ある、その古塚を發いて見たら、鏡や太刀が澤山出た、わたしは誰も知らないやうに、山の陰の藪の中へ、さう云ふ物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に賣り渡したい、——と云ふ話をしたのです。男は何時かわたしの話に、だんだん心を動かし初めました。それから、——どうです、慾と云ふものは、恐いではありませんか？ それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けてゐたのです。

わたしは藪の前へ來ると、寶はこの中に埋めてある、見に来てくれと云ひました。男は慾に渴いてゐますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つていと云ふのです。又あの藪の茂つてゐるのを見ては、さう云ふのも無理はありません。わたしはこれも寶を云へば、思ふ壺にはまつたのですから、女一人を残した儘、男と藪の中へはひりました。

藪は少時の間は竹ばかりです。が、半町程行つた所に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂ぐるのには、これ程都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、寶は杉の下に埋めてあると、尤もらしい謔をつきました。男はわたしにさう云はれると、もう瘦せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内

に竹が疎らになると、何本も杉が竝んでゐる、——わたしは其處へ來るが早い、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いてゐるだけに、力は相當にあつたやうですが、不意を打たれてはたまりません。忽ち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまひました。縄ですか？ 縄は盗人の難有さに、何時堀を越えるかわかりませんから、ちやんと腰につけてゐたのです。勿論聲を出させない爲にも、竹の落葉を頼張らせれば、外に面倒はありません。

わたしは男を片附けてしまふと、今度は又女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云ひに行きました。これも圖星に當つたのは、申し上げるまでもありません。まい。女は市女笠を脱いだ儘、わたしに手をとられながら、藪の奥へはひつて來ました。所が其處へ來て見ると、男は杉の根に縛られてゐる、——女はそれを一目見るなり、何時の間にか懐から出してゐたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あの位氣性の烈しい女は、一人も見つた事ありません。もしその時でも油断してゐたらば、一突きに脾腹を突かれたでせう。いや、それは身を躲した所が、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我也仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかかうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀を打ち落しました。いくら氣の勝つた女でも、

得物がなければ仕方がありません。わたしはどうとう思ひ通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——さうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのやうに縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云ふのです。いや、その内どちらにしろ、生き残つた男につれ添ひたい、——さうも喘ぎ喘ぎ云ふのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでせう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとひ神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、唯かう云ふ一事だけです。これはあなた方の思ふやうに、卑しい色慾ではありません。もしその時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃

げてしまつたでせう。男もさうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたので
す。が、薄暗い藪の中に、ぢつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、此處
は去るまいと覺悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の繩を解いた
上、太刀打ちをしると云ひました。(杉の根がたに落ちてゐたのは、その時捨て忘れた繩
なのです。)男は血相を變へた儘、太い太刀を引き抜きました。と思ふと口も利かずに、
憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるま
でもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、
——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つてゐる
のです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。(快活
なる微笑)

わたしは男が倒れると同時に、血に染まつた刀を下げたなり、女の方を振り返りました。
すると、——どうです、あの女は何處にもゐないではありませんか？ わたしは女がどち
らへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残
つてゐません。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、斷末魔の音がするだけ

です。

事ことによるとあの女をんなは、わたしが太刀打たちうちを始はじめるが早はやいか、人ひとの助たすけでも呼よぶ爲ために、藪やぶをくぐつて逃にげたのかも知しれない。——わたしはさう考かんがへると、今こんど度はわたしの命いのちですから、太刀たちや弓矢ゆみやうばを奪うばつたなり、すぐにも又またもとの山路やまちへ出でました。其處そこにはまだ女をんなの馬うまが、静しづかに草くさを食くつてゐます。その後ごの事ことは申まをし上あげるだけ、無用むようの口數くちかずに過すぎますまい。唯ただ、都みやこへはいる前まへに、太刀たちだけはもう手放てはなしてゐました。——わたしの白はくし状じやうはこれだけです。どうせ一度どは櫓あふちこすゑの梢かに、懸かける首くびと思おもつてゐますから、どうか極刑ごくけいに遇あはせて下さい。 (昂然かうぜんたる態度たいど)

清水寺に來れる女の懺悔

——その紺こんの水すゐかん干を着きた男をとこは、わたしを手てごめにしてしまふと、縛しばられた夫をとこを眺ながめながら、嘲あざけるやうに笑わらひました。夫をとこはどんなに無念むねんだつたでせう。が、いくら身悶みもたえをしても、體からだ中ちゆうにかかつた繩目なわめは、一層そうひしひしと食くひ入いるだけです。わたしは思おもはず夫をとこの側そばへ、轉まろぶやうに走はしり寄よりました。いえ、走はしり寄よらうとしたのです。しかし男をとこは咄嗟とつさの間ま

に、わたしを其處へ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云ひやうのない輝きが、宿つてゐるのを覺りました。何とも云ひやうのない、——わたしはあの眼を思ひ出すと、今でも身震ひが出ずにはゐられません。口さへ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を傳へたのです。しかも其處に閃いてゐたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——唯わたしを蔑んだ、冷たい光だつたではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

その内にやつと氣がついて見ると、あの紺の水干の男は、もう何處かへ行つてゐました。跡には唯杉の根がたに、夫が縛られてゐるだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと體を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと變りません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せてゐるのです。恥しき、悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中は、何と云へば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覺悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの

恥を御覽になりました。わたしはこのままあなた一人、お残り申す譯には參りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云ひました。それでも夫は忌はしさうに、わたしを見つめてゐるばかりなのです。わたしは裂けさうな胸を抑へながら、夫の太刀を探しました。が、あの盗人に奪はれたのでせう、太刀は勿論弓矢さへも、藪の中には見當りません。しかし幸ひ小刀だけは、わたしの足もとに落ちてゐるのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にかう云ひました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やつと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまつてゐますから、聲は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、忽ちその言葉を感じました。夫はわたしを蔑んだ儘、「殺せ」と一言云つたのです。わたしは殆ど夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしは又この時も、氣を失つてしまつたのでせう。やつとあたりを見まはした時には、夫はもう縛られた儘、とうに息が絶えてゐました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一すぢ落ちてゐるのです。わたしは泣き聲を呑みながら、死骸の繩を解き捨てました。さうして、——さうしてわたしがどうなつたか？ それだけはもう

わたしには、申し上げる力もありません。兎に角わたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにかうしてゐる限り、これも自慢にはなりません。 (寂しき微笑) わたしのやうに腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、一體どうすれば好いのでせう？ 一體わたしは、——わたしは、—— (突然烈しき歎歎)

巫女の口を借りたる死靈の物語

——盗人は妻を手ごめにする、其處へ腰を下した儘、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。體も杉の根に縛られてゐる。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云ふ事を眞に受けるな、何を云つても嘘と思へ、——おれはそんな意味を傳へたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、ぢつと膝へ目をやつてゐる。それがどうも盗人の言葉に、聞き入つてゐるやうに見えるではないか？ おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めてゐる。

る。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合ふまい。そんな夫に連れ添つてゐるより、自分の妻になる氣はないか？ 自分はいとしいと思へばこそ、大それた眞似も働いたのだ、——盗人はとうとう大膽にも、さう云ふ話さへ持ち出した。

盗人にかう云はれると、妻はうつとりと顔を擡げた。おれはまだあの時程、美しい妻は見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有に迷つてゐても、妻の返事を思ひ出す毎に、嗔恚に燃えなかつたためしはない。妻は確にかう云つた、——「では何處へでもつれて行つて下さい。」

(長き沈黙)

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、今程おれも苦しみはしまゐ。しかし妻は夢のやうに、盗人に手をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顔色を失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません。」——妻は氣が狂つたやうに、何度もかう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のやうに、今でも遠い闇の底へ、まつ逆様におれを吹き落さうとする。一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出した事があらうか？ 一度でもこの位呪はしい言葉が、人間の耳に觸れた

事があらうか？ 一度でもこの位、——（突然迸る如き嘲笑）その言葉を聞いた時は、盗人さへ色を失つてしまつた。「あの人を殺して下さい。」——妻はさう叫びながら、盗人の腕に縋つてゐる。盗人はちつと妻を見た儘、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思ふか思はない内に、妻は竹の落葉の上へ、唯一蹴りに蹴倒された、（再、迸る如き嘲笑）盗人は靜かに兩腕を組むと、おれの姿へ眼をやつた。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事は唯頷けば好い。殺すか？——」
 —おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。（再、長き沈黙）
 妻はおれがためらふ内に、何か一聲叫ぶが早い、忽ち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟に飛びかかつたが、これは袖さへ捉へなかつたらしい。おれは唯、幻のやうに、さう云ふ景色を眺めてゐた。
 盗人は妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの繩を切つた。「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまふ時に、かう呟いたのを覚えてゐる。その跡は何處も靜かだつた。いや、まだ誰かの泣く聲がする。おれは繩を解きながら、ちつと耳を澄ませて見た。が、その聲も氣がついて見れば、おれ自身しんの泣いてゐる聲だつたではないか？（三度、長き沈黙）

おれはやつと杉すぎの根ねから、疲つかれ果はてた體からだを起おこした。おれの前まへには妻つまが落おとした、小刀さすが一ひとつ光ひかつてゐる。おれはそれを手てにとると、一突ひとつきにおれの胸むねへ刺さした。何か腥なになまぐい塊かたまりがおれの口くちへこみ上げあげて來くる。が、苦くるしみは少すこしもない。唯ただ胸むねが冷つめたくなる、一層そうあたりがしんとしてしまつた。ああ、何なんと云いふ静しづかさだらう。この山陰やまかげの藪やぶの空そらには、小鳥こどり一羽ひとつ囀さえずりに來こない。唯ただ杉すぎや竹たけの杪うらに、寂さびしい日影ひかげが漂ただよつてゐる。日影ひかげが、——それも次第しだいに薄うすれて來くる。もう杉すぎや竹たけも見みえない。おれは其處そこに倒たふれた儘まま、深ふかい静しづかさに包みまれてゐる。

その時とき誰たれか忍しのび足あしに、おれの側そばへ來きたものがある。おれはそちらを見みようとした。が、おれのまはりには、何時いつか薄うすやみ闇やみが立たちこめてゐる。誰たれか、——その誰たれかは見みえない手てに、そつと胸むねの小刀さすを抜ぬいた。同時どうじにおれの口くちの中なかには、もう一度いちど血潮どちしほが溢あふれて來くる。おれはそれぎり永えい久きうに、中ちゆう有ゆうの闇やみへ沈しづんでしまつた。……

(大正十年十二月作)

青空文庫情報

底本：「現代日本文學全集 第三〇篇 芥川龍之介集」改造社

1928（昭和3）年1月9日発行

初出：「新潮」

1922（大正11）年1月1日

※表題は底本では、「藪《やぶ》の中《なか》」となっています。

入力：高柳典子

校正：岡山勝美

2012年2月8日作成

2012年3月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

藪の中

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>